

2023年10月22日 主日礼拝

説教題「救いは主のもとにあり」詩編3編1～9節

主任牧師 加藤 誠

「救いは主のもとにあります。あなたの祝福があなたの民の上にありますように」(詩編3編9節)

キリスト教は音楽にあふれた宗教です。礼拝の中では賛美歌が歌われ、さまざまな楽器による賛美歌がささげられます。このキリスト教の礼拝の特徴は旧約聖書のユダヤ教の礼拝の特長を受け継いだものです。今朝ご一緒に開いた詩編は、旧約時代の人々が神さまに向けてささげた祈りが集められたもので、詩編には日々私たちが体験する神さまの深い慈しみや恵みに対する感謝や喜びだけでなく、それぞれが直面する悲しみや苦悩が正直に語られ、神さまの導きや救いを切実に求めた祈りが記されています。最近YouTubeなどでユダヤ教の礼拝に触れることができるようになりましたが、その礼拝の様子を見ると人々が実によく賛美歌を歌っています。このユダヤ教の礼拝を新約の人たちも受け継いだのだということがよく分かるのです。

例えばマリアは自分の思いをはるかに超えた神さまの計画を告げられた時に、大きく戸惑い、恐れ、不安を覚えながらも神さまに賛美をささげています。また主イエスは十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の晩餐を共にした後、賛美を歌いながらオリブ山に向かったと聖書は記しています。いったい主イエスは十字架を前にして、どの詩編の賛美歌を歌ったのでしょうか。「主は我が牧者なり」と歌った詩編23編だったのでしょうか。それとも「主なる神が平和を宣言される」という信仰を歌った詩編85編ではないかな…など想像が膨らみます。また使徒言行録を開くと使徒パウロとシラスが理不尽な迫害を受けて鞭打たれ、牢屋に投げ込まれた夜に賛美を歌っています。彼らは鞭打たれた傷の痛みを耐えながら、どの詩編を歌ったのでしょうか。詩編は、感謝や喜びだけでなく、私たちが日々直面するさまざまな闘いの場面、なお心を神さまに向けて賛美をささげていく信仰を教えてくれているものなのです。

先日こんなことがありました。剣道の稽古で、ある年配の方に稽古をつけていただいた後、着替えながら「仕事は何をしているのですか？」と尋ねられたので「キリスト教の牧師です」と答えますと、「そういえば自分も教会の幼稚園に通っていたのですが『いつくしみ深き』という賛美歌を覚えてますよ」と言われました。七十半ばの方でしたから戦後まもない時代のことだと思いますが、幼い時に歌った賛美歌が七十年経ってもその心に刻まれているということはすごいことだと思います。「ぜひ賛美歌を歌いに来てください」と言いますと「私などはもう俗に染まっていて、とても賛美歌など歌えません」と言われるので「俗に染まっているという意味では自分も含めて教会に来ている人も何も変わりませんよ」と答えたのですが、その後でふと思ったのは「賛美歌を歌う」ということは「清く正しく、罪深い俗世間から離れて生きていく人たちのもの」と誤解されているかもしれないなと思いました。

今朝この礼拝に集っている私たちは「怒りや憎しみなどからは離れて、心清らかに

神さまのことだけを考えているから」ここに来ているのでしょうか。いや、実際はその逆で「日々の人間関係の中で葛藤し、苦悩し、神さまの言葉のままに生きられない自分を見出しているからこそ」、毎週の礼拝に来ているのではないのでしょうか。

先日ある方がここ数年ずっと直面してきた闘いのことを話してくださいました。年老いたご両親の介護に通い、特に昔から自己中心で周りの人に権威的抑圧的で生きてきた父の下の世話をしても、感謝の一言もないどころか、とても受け入れがたい言葉をぶつけられたりする。また両親の介護には一切手を出さず、見て見ぬふりをしてきた兄が財産のことになると恥ずかしげもなく自分の権利を主張してくる。それは毎日が「試されているなあ」と思う連続であり、神さまが語られている言葉と自分の中に生まれてくる黒い心との闘いの連続だった。そんな中で教会につながり、イエスさまにつながられていることがどんなにありがたいことか、改めて感謝の思いでいっぱいになっていますと。

その方の思いを受けて詩編を開いた時に示されたのが今朝と一緒に読んだ詩編3編でした。この詩編は苦しみの中に神さまに向けて紡ぎだされた祈りが記されています。多くの者が「彼に神の救いなどあるか」という非難をぶつけてくる。そういう中で「主よ、それでもあなたはわたしの盾、わたしの栄え、わたしの頭を高く上げてくださる方」と呼んで祈っているのです。ただ8節に出てくる「すべての敵の顎を打ち砕き、神に逆らう者の刃を砕いてください」のくだりに戸惑いを覚えます。「こんな祈りをして良いのか」と。なぜなら主イエスは「あなたの敵を愛し、あなたを迫害する者のために祈りなさい」と教えられたからです。クリスチャンはどんな時にも赦しの祈りをささげなければならないのではないかと。もちろんできれば主イエスが教えてくださったように祈りたいのですが、私たちはすぐには「できない」。そのことを考えたときに「ああ、そうか。もしかしたら神さまは、あなたの腹の底にある思いをわたしにすべて注いで良いのだよ」と言われているのかもしれないと示されました。神さまはわたしの心の中もすべてお見通し。私たちが自分の心に沸き起こる怒りや憎しみや悲しみなどを自分一人で抱え込むのではなく、そのまま神にぶつけて良い。格好を付けずにそのままの思いを祈りなさいと教えてくださったのかもしれないと。

ただ「敵の顎を打ち砕いてください」と祈っているうちに十字架の主が見えてくるのです。わたしのために祈り、わたしとその人との間に今日も立っておられる十字架の主に気づかされていきます。そして、私たちは自分の手で正義を成し遂げるのではなく、すべてを神さまに委ねて、神さまの導きに従うことを学ぶように。そして「救いは主よ、あなたのもとにあります」という告白に導かれていくことを教えている詩編なのではないかと、改めて教えられたのでした。

十字架の主は、日々の人間関係に葛藤し苦悩する私たちと共にあり、そのようにしか生きられない私たちが神の愛に連れ戻すために来てくださったことを覚えたいのです。今週もこの礼拝から主イエスの恵みの伴いをいただいて出かけていきましょう。